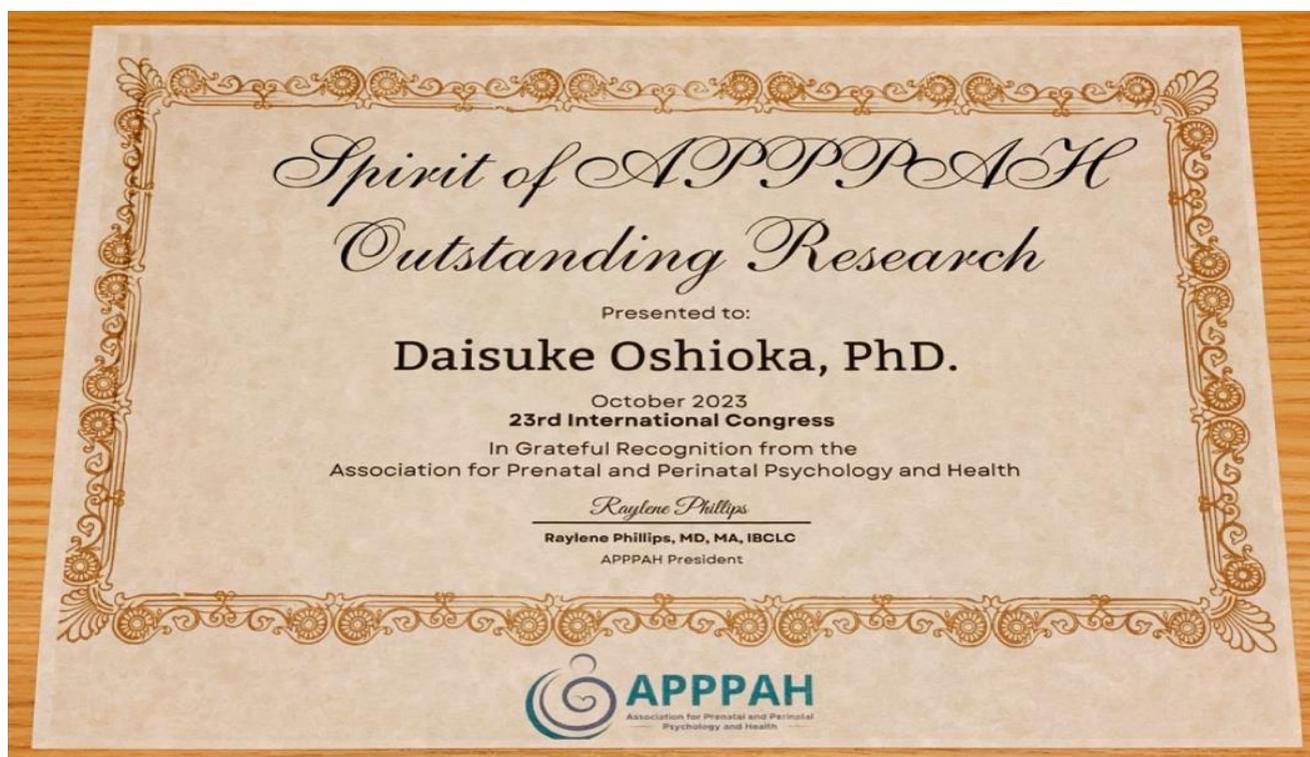


## 心理学コース・研究紹介(押岡大覚教授)

### 【国際会議において優秀研究賞を受賞】

本学人間科学部 心理・文化学科の押岡大覚教授(臨床心理士・公認心理師・博士(心理学))が、「第23回 出生前・周産期心理学と健康学会国際会議(於:アメリカ コロラド州デンバー 2023年10月22日)」において「優秀研究賞」を受賞されました(Spirit of APPPAH Award for "Outstanding Research". APPPAH's 23rd International Congress, October 19-22, 2023 Denver, Colorado, USA)。日本人では初の受賞です。



Spirit of APPPAH Award for "Outstanding Research" (優秀研究賞)の賞状

この受賞は、2020年に押岡教授らが海外の専門雑誌（JOPPPAH）に発表した画期的な論文，“Study of Prenatal Experiencing-Modality from Developmental Clinical and ‘Kansei’ Psychology Perspectives（邦題：胎生期体験過程の様相に関する発達臨床ならびに感性心理学的研究）”が高く評価されたことによるものです（JOPPPAHへの論文の掲載自体が日本人では5人目という快挙でもありました！）。



授賞式のスクリーンに映し出された押岡教授  
(右上は APPPAH 理事長 Dr. Raylene Phillips)

## 【研究紹介(押岡教授による)】

この研究は、理論的空白にある「胎児の心の発達過程」を解明しようとする挑戦の第一歩です。「前言語・前概念の心理学」とも呼ばれる、Gendlin, E.T.(1961)の「体験過程理論」をもとに、胎生期の心のありようへと接近を試みました。

胎内での記憶を持つ人へのインタビュー等を元に作成・販売されている絵本5冊について特別な分析を施した結果、私たち出生後のヒトと同様に、胎児についても、豊かで、有意味な心の世界を経験している可能性があることを理論的に提出することができました。また、私たちのような外的言語を持たず、概念化を行うことが不可能であると考えられる胎児であっても、前言語的・前概念的な心の世界で、豊かな意味を経験している可能性があることも提出することができました。

医学的に受精から出生、そして死という「命の連続性」は解明されてきていますが、心理学的に胎内からの「心の連続性」は未だ解明されておらず、今回の受賞をきっかけに、更にこの研究を進めていきたいと考えています。